

# へき地・小規模校における体育の事例研究

## －相撲授業の有効性から－

小出 高義                      越川 茂樹                      福井 泰平  
(北海道教育大学旭川校)      (北海道教育大学釧路校)      (旭川市立桜岡中学校)

### A Case Study of Physical Education in Rural Small School －From the effectiveness of Sumo lesson－

Takayoshi KOIDE, Shigeki KOSHIKAWA and Taihei FUKUI

#### 【概要】

へき地小規模の中学校では、教員定数の関係から全教科の先生を揃えることは難しく、体育は免許外の先生が担当することがある。しかし、体育で扱われる領域が多岐に渡るため、その指導は困難であることが予想され、特に困難さを感じるものとして武道があげられる。今回は、全校15名の中学校における相撲授業の実践から、その有効性を明らかにすることを試みた。まず、へき地小規模中学校での武道領域の扱いにおける問題点を整理した。次に、相撲の特性を大切にした単元計画を示し、その実践から得られた生徒の感想、教科担任およびスポーツ教育学の専門家による分析から、考察を加えた。このような手続きにより、相撲は他の武道種目より武道経験のない先生にとっても、指導の見通しが持ちやすいことを示した。本研究および、今後の研究の積み重ねにより、武道の授業づくりに苦慮している先生方の有効な資料の提供を目指している。

## 1 はじめに（学校の実態から）

### 1.1 学校および生徒の特色

旭川市立桜岡中学校は、旭川市の東部の農村地帯に位置し、市街の中心部より自動車で30分程の場所にある。（近くには、行動型の展示で有名になった旭山動物園がある。）この中学校は、旭川第五小学校との小中併置校として地域の教育を支えてきたが、平成2年に小学校・中学校共に「通学区域外就学の特例校」として、旭川市より指定されたため、通学区域外からの児童・生徒を受け入れるようになった。これにより、桜岡中学校では、全校生徒15名のうち12名が学校区以外からの通学となっている。

また、教員は教頭を含め8人体制であり、この学校も他のへき地・小規模校同様に、全教科の教員を揃えることができない。

さらに、生徒については、少人数ではあるものの基礎学力の個人差が大きく、学習習慣や基本的な生活習慣が未定着の生徒がおり、基礎・基本的な知識・技能の習得と、その活用力や探求心の育成が最重要課題であると、校内研究会などで議論されている。

### 1.2 桜岡中学校と相撲授業

本校で相撲を導入しようと考えた経緯は、以下のような観点による。

①柔道よりも安全性が高いように思ったこと。

②相撲のまわしは、柔道着よりも衛生状態を保ちやすいように思われたこと。

③剣道の防具と比較しても衛生状態を保ちやすいように思われたこと。

④用具に関する費用が、柔道・剣道よりも安価に思ったこと。

⑤TV・新聞で大きく取り上げられることが多く、興味・関心を持ちやすいと思ったこと。

⑥教育大学(旭川校)に熱心な大学教員<sup>註1)</sup>がいることを知っていたこと。

⑦空手や合気道はそもそも導入検討の対象にはいっていなかったこと。

これらのことから、本校では平成27年に相撲の授業づくりの協力依頼をすることとなった。その具体的な内容は、授業導入場面のイメージが持てなかったため、そこを出前授業として実践して欲しいというものであった。この時、保健体育科の授業を担当していたのは、社会科の教諭であった。

### 1.3 教科担当と武道授業

桜岡中学校には、旭川市教育委員会から支給された柔道量があり、加えて生徒が授業を行うのに支障がない数の柔道着が準備されていた。この用具の支給を受けた当時は、保健体育科を主たる免許とする教員がいたため、柔道の授業が問題なく行われていた。

しかし、その教員が転出した際に、次の体育教員を補充することができなかつたため、前出の社会科の教諭が体育を担当することとなった。

このような例は、へき地・小規模中学校において決して珍しい事例ではない。けれども免許外の教員でも自分が経験のある種目ならまだしも、武道やダンスを指導するとなると、かなりの抵抗感を持つことが予想される。

さらに、どの小規模の中学校でも子どもたちの学力向上を狙い、高校入試での得点力の保障を考えると、入試科目中心の教員構成になるのはやむを得ない。したがって、指導が困難であったとしても保健体育科を優先する教員配置は考えにくい。この桜岡中学校においても、今後確実に体育教員を配置できる見通しも厳しく、武道であるならば、専門外の先生も授業づくりがしやすい相撲での実践研究の必要があった。

## 2 必修化による北海道での武道授業の実施状況

平成24年度に完全実施となった中学校学習指導要領解説「保健体育編」（以下、指導要領解説）では、武道とダンスの男女必修化が、保健体育科における学習指導要領改訂の大きな改善点として強調された。つまり、それまでは男子が武道を、女子がダンスをとという体育のカリキュラムを組んでいた学校であっても、男女に関係なく武道およびダンスを学習させなければならなくなったのである。

では、その武道の扱いはどのようになっているのか。指導要領解説では、柔道、剣道、相撲を列挙しているものの、「地域や学校の実態に応じて、なぎなたなどのその他の武道についても履修させることができる」（文部科学省、2008）としている。

そこで、実際どの種目が体育授業では取り上げられているのか、その割合を見てみたい。北村は、全国1000校の公立中学校へ、どの武道種目を実施しているか調査した。（北村、2010）そこで回収された455校（回収率45.5%）のうち完全実施以前から武道を実施していた学校は386校（84.8%）であった。その実施している学校での種目の割合は、柔道が67.3%、剣道が26.3%、相撲が5.3%、その他1.2%と報告されている。

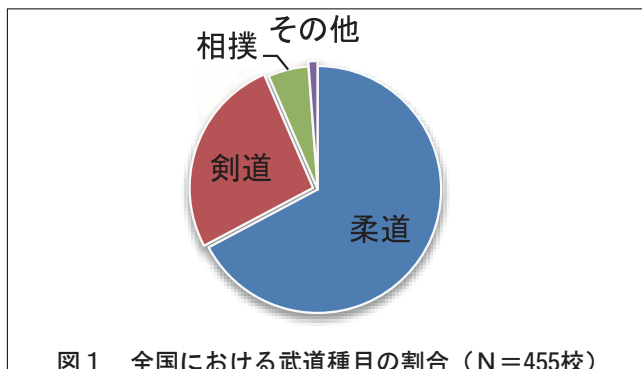


図1 全国における武道種目の割合 (N=455校)

さらに、北海道の実施状況については、平成24年8月の定例道議会の答弁の中で、土井健康・体育課長が「中学校における必修としての武道の実施状況についてであるが、本年度、札幌を除く公立中学校において、柔道を実施する学校は341校で、全体の63%、剣道を実施する学校は156校で29%、相撲を実施する学校は36校で7%、空手や合気道を実施する学校は11校で2%となっており、その中で、複数の武道種目を実施する学校は6校である。」<sup>註2)</sup>と述べている。

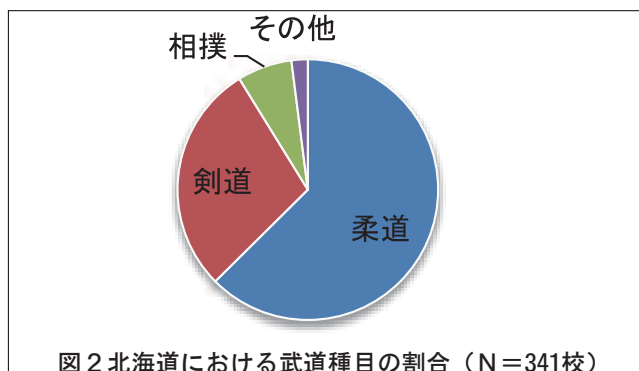


図2 北海道における武道種目の割合 (N=341校)

図1と図2を比べてみると、全国と北海道は授業で扱われる武道種目の割合は、ほぼ同じ傾向にあるといえる。

さらに、旭川市に目を向けてみると、平成24年の中学校指導要領完全実施に向けて、旭川市教育委員会は市内の中学校29校<sup>註3)</sup>に、学校の状態に応じて剣道防具か柔道畳を支給しようとして調査したところ、柔道畳を希望した学校が22校、剣道防具を希望した学校が7校であった。

武道必修化にむけてマスコミは、柔道が危険であると報道していたものの、その実施率はこのように群を抜いている。これには、様々な理由があろうが、他の武道種目の授業開発が進んでいないことも要因と考えられる。特に実施率が際立って低い相撲に関しては、その授業研究が必要であると考えられる。

## 3 相撲授業の有効性

### 3.1 勝敗の明確さ

武道は機能的特性から見たとき、他のスポーツ種目同様に競争型に分類される。そこでは、お互いの技を出し合い勝敗を競い合うことが、楽しさの根源となる。次に、この武道三種目の勝敗に関する判定基準を比較してみたい。

柔道で一本となるのは、投げ技の場合「技をかけるか、または相手の技をはずして、相当の勢い、あるいははずみで、だいたい仰向けに倒したとき」となり、固め技の場合「『参った』と発声するか、または手か足で相手または自分の体あるいは畳を2度以上打って合図したとき」及び「『抑え込み』と宣告があってから20秒間、抑えられた者がそれをはずすことができなかつたとき」（全国中学校柔道大会）としている。

剣道では、有効打突をもって一本とするが、その基準は「有効打突は、充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとする」としている。

相撲での勝敗の決し方は「どちらか一方の体が土俵外に着地する」というのと「どちらか一方の足の裏以外が着地する」というものである。

このように、柔道の投げ技と剣道の有効打突を相撲と比べてみると、相撲が最も勝敗のイメージを持ちやすいといえる。そこで、この勝敗の明確さからも、未経験の授業者および学習者が体育授業で実施する場合、相撲は勝敗の判断がしやすく、競争型での授業を計画したとき、比較的早い段階からその楽しさを味わうことが出来る種目であるといえる。

### 3.2 用具・施設面から

武道を安全に学習するためには、用器具の充実が求められる。柔道であれば投げ技での衝撃を吸収してくれる畳であり、剣道であれば竹刀の打突から身体を守ってくれる防具である。

相撲はグラウンドの土に土俵を設置することも可能であるが、北海道では屋外で活動できるのが短期間なため、陸上競技、サッカー、ソフトボールなどが優先されることが予想され、相撲はグラウンドが使用できない時期に体育館で実施することが、年間カリキュラムを見据えた上でも実質的であるといえる。

体育館で相撲を実施する場合は、相撲マットを使用することが有効である。これは、マット運動用のマット2枚を強力なマジックテープで連結し正方形としている。その表面に俵を示す線が印刷されている。相撲の授業づくりに詳しい生沼は、この様な相撲マットでも「十分に相撲の授業は展開できる」(生沼, 2010)と述べており、本実践も冬季に体育館で実施することもあり、相撲マットを2組用意し、その周囲を柔道畳とマット運動用マットを敷き詰めることで場づくりを行った。

### 3.3 導入方法の工夫 押し相撲からのスタート

今の子どもたちは、昔と比べ相撲をテレビで見ることはあっても、遊びの中で行う機会はほぼないといえる。それは、外遊びの減少と共に、他者との身体接触の経験の少なさが関係しているとみられる。

これまでの相撲の授業実践(小出, 2010)では、土俵中央で相手としっかり組み合った所からの「押しだけの相撲」から取り組みを開始した。それにより「組んだ状態からの押し相撲」→「組んだ状態からの相撲」(投げ技を用いても良い)→「立ち会いからの相撲」(一般的な相撲)と段階を踏み、生徒の活動を引き出すよう仕組んだ。

これにより、これまでの課題となっていた「立ち会いでの相手の出方を伺い、すぐに相手に向かっていけない姿」を解消することを狙った。

## 4 単元計画

上述の様な生徒の実態と相撲の特性を活かした授業を目指して、以下のような計画を立案した。

### 4.1 単元名

「相撲」 全10時間扱い

### 4.2 実施日

平成29年2月17・20・23・30日および3月1日  
(2時間続き授業を5回実施)

### 4.3 授業学級

旭川市立桜岡中学校

1・2・3学年 男子7名 女子8名 計15名

(長期欠席により参加できなかった男子1名を含む)

### 4.4 授業者

小出高義

### 4.5 学習のねらいと道筋

自分の目指す相撲に向け仲間とともに技を高め、それらを発揮する団体戦の試合を楽しむ。

#### ○ねらい1

押し方を工夫したり、自分の課題を見つけたりしながら、個人戦での相撲を楽しむ。

#### ○ねらい2

自分にあった立ち会いや技を学び、それらをチームの仲間と練習しながら、積極的に使っていく団体戦での相撲を楽しむ。

4.6 単元の展開

段階	学習活動	予想される活動	指導・助言《評価》	時間
はじめ	○ オリエンテーション <相撲学習を始めるに当たって> ・相撲の歴史…力士の文化から体育の学習としての相撲へ ・礼と所作（立礼，蹲踞，塵浄水） ・土俵…土俵の意味（相撲マットの設定方法を含む） ・服装…なぜ裸にまわしなのか（運動着の上からまわしを着ける時の注意事項） ・まわし…まわしの締め方と扱い方 ・活動グループと学習の進め方の確認			1時間
なか	1 準備運動と基本ドリル ・運び足 ・準備運動 ・ストレッチ ・腰割り ・四股	・全体で土俵を囲んで準備運動をする ・足の裏で土俵を感じながら行う ・伸びている部位を意識する ・構えでは腰が上がってしまう ・四股では脚がぐらつく ・伸展されている筋肉を意識する	・全員で輪になり，運び足から大きな声を出すことを引き出す ・気持ちよく伸ばされている部位を意識させる ・腰を膝が直角になるまで下ろしているか確認させる ・支え足の膝を伸ばし，前かがみにならないように行わせる	5
	ねらい1 押し方を工夫したり，自分の課題を見つけたりしながら，押し相撲を楽しむ。			
	2 男女別押し相撲のリーグ戦	・対戦表を使って，男女ごとに試合を進められる ・最初の試合なので，それぞれが自分の力を試すため，精一杯相手を押し切ろうとする ・自分の力を出し切る前に相手に押されている ・脚が伸び腰の位置が高い	・土俵中央で十分に組んだ状態から，審判が両者の背中を叩く合図で押し相撲を開始させる ・「アドバイスカード」を手がかりに各自のめあてを持たせる  《組んだ状態からの押し相撲が楽しめたか》	
か	②立ち会いからの相撲	・相手とのタイミングを合わせようと，相手をよく見る ・すぐ上体が立ってしまう ・上体が逃げてしまう ・相手の突進力に対応できない ・仲間に自分の取り組みについてのアドバイスを求める ・自分の行いたい技を仲間に伝えて約束けいこをする ・相手優位に組まれると，押し出されやすいな？	・審判には，両者をよく見て「はっけよい」のかけ声をかけさせる ・他の生徒には，両者が両手を土俵に着いてから立ち会ったか確認させる 《試合進行や禁じ手が理解できたか》 ×首から上は触れない ×相手の運動着は掴まない ×立ち合いのタイミングを遅らせたり，逃げたりしない ・試合の様子を仲間に見てもらい，各自のめあてを参考にさせる ・めあてに応じた練習方法が見つけられない生徒には個別指導をする	

賽	番	番
	優勝	
	大賞	
	優勝	
	小賞	
	優勝	



な  か	ねらい2 自分にあった立ち会いや技を学び、それらをチームの仲間と練習しながら、積極的に使っていく相撲を楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手より早くまわしを取る練習を行う</li> </ul>	《立ち会いからの相撲が楽しめたか》	4 と ½
	4 自分の技を出し合う相撲での団体戦	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料を手がかりに、自分のとってみたい相撲を考える</li> <li>相手にまわしを取られないように、相手の腕をはね上げていこう！</li> <li>・自分のとってみたい相撲に向け、仲間と約束けいこをする</li> <li>腕のことばかり考えて、腰が浮いていると言われたので、低く入っていこう！</li> <li>・低く入って相手の腕をはね上げる練習を仲間と行う</li> <li>うまく相手に入り込むことができ、これまで勝てなかった相手に勝つことができた！</li> <li>・相手の懐に入り込んだ後の投げ技について練習する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・押し相撲における各自のめあてを振り返らせ、立ち会い後どの様に自分の技を出していくか練習させる</li> <li>・「アドバイスカード」でめあてが見い出せない生徒には一緒に考える</li> <li>《試合の進め方を理解しているか》</li> <li>・練習方法がめあてにあっていない生徒には、練習方法を紹介して動きを高めさせる</li> <li>・めあての達成から次のめあての設定について助言する</li> <li>・相手の動きに応じていくにはどうしたらいいのか考えさせる</li> <li>《めあて達成に向け努力しつつ、自分の目指す相撲が楽しめたか》</li> </ul>	
ま と め	5 単元のまとめ <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人で、単元の願いは達成されたか、自分の活動を振り返る</li> <li>・グループで、自分の活動で良かった点や嬉しかった点を発表しあう</li> <li>・全体で、各グループの一番良い発表が出来た人に発表してもらう</li> <li>・次の単元に繋がる学びの高まりを全体で確認する</li> </ul>			½

4.7 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	運動の技能	知識・理解
自ら準備・片付けを行うと共に、仲間を尊重し、安全に留意しながらも積極的に取り組んでいる。	自己の課題に気付き、その解決に向けためあてを設定することができる。	相撲の特性を味わうために、基本動作や基本的な技を身につけている。	相撲の特性や成り立ち、作や技、および試合の進め方について理解している。

5 授業の実際

5.1 生徒の感想から

本実践後、生徒に単元学習を終えての感想記述をもとめた。それらをまとめたものが、「資料1 単元終了後のアンケートから」(文末参照)である。そこで、以下の3項目に

ついて、考察を加えたい。

5.1.1 本実践での楽しさについて

ここでは、ほとんどの生徒が相撲の楽しさを勝敗にかかわる内容で記述している。その勝敗についても、「決着が付くまで行えること」「自分より強い相手に勝った時」「先輩

に勝った時」「投げ技が決まった時」と、競争型の楽しさに触れていたことが分かる。

ただ、「相手の弱点を攻めること」「力だけでなく工夫により勝敗を変えられる」といった勝負の醍醐味についての記述も見られた。

これは、相撲には「金星」という「勝てないと思った格上の相手に勝つこと」という言葉があるように、体格差があっても諦めず戦うことを指導した。さらに、そのような姿を引き出すためにも「のこった、のこった」というかけ声で試合を盛り上げるにより、生徒たちの粘り強い取り組みが多く見られた。

### 5.1.2 本実践での学び

体育授業では、活動が豊かであっても、学びがなければ学習といえるのか、という問いをよく耳にする。そこで、この授業で生徒たちは何を学んだのかを検討したい。

多くの生徒が、立ち合いについて記述した。相撲は立ち合いが命といわれるが、本実践では相手のまわしをお互いに掴んだ押し相撲からスタートしている。



写真1 セフティーマットに向かって立ち合いの練習

その後の立ち合いを入れた個人戦や団体戦において、生徒は立ち合いの重要性に気付き、そこを自分なりに工夫している。体育館の壁に立ててあるセフティーマットにぶつかっていき練習をしていた男子や、素早く相手のまわしをとって自分の優位な体勢を掴むために先生に胸を貸してくださいと練習相手を申し出た女子がいた。

これらの生徒は、教師の指示により活動をしたわけではなく、自発的にその活動を行っていた。投げ技を段階的に指導して最後に試合を行うという授業スタイルではなく、試合をして自分の課題を見出し練習するというスタイルでは、勝敗に強くこだわらないとこのような学習は成立しない。

### 5.1.3 本実践での思考・判断

さらに、練習は自分に必要と思われる内容を行うのか、基礎・基本を繰り返し行えばいいのかという議論には、学



写真2 先生に稽古を申し出る女子

習者の自分に必要な内容について思考・判断する力が求められる。

そこで、この生徒たちはどのようなことを考え・工夫したのかについてみてみたい。多くの生徒は戦う相手に対しての作戦を考え、その具体的な対応策について工夫している。「早く出るようにした」「相手の中に入って強く押す」「ある程度耐えて、相手の体力がなくなったところを見計らって攻め込む」などの記述が見られた。

これらの対応策は、団体戦になってから仲間と意見交換しながら練習相手になってもらう姿が見られた。立ち合いで素早く出ることを身につけたい女子は、同じチームの男子にその相手をしてもらう姿も見られた。男女の対戦は行わなかったが、練習の中では男女別で練習をしなさいと指導したわけではないので、そのような姿が現れたものと思われる。このように自然と男女で活動する姿が出てくるところも、少人数学級で男女共習の授業であるからこそといえる。

## 5.2 授業観察者から

### 5.2.1 教科担任の立場から<sup>注4)</sup>

まず、これまでの体育授業からは、武道に対して積極的に取り組むとは予想できなかったが、今回の実践では生徒の興味・関心が非常に高かった。前単元の終了時に、次の単元は武道だと予告したところ、「えー」という声が上がったことから、武道には抵抗感があったものの、生徒は相撲に、柔道・剣道よりも取り組みやすさを感じているように思えた。

また、運動が苦手な子の活躍が見られた。これまで、陸上競技や球技などを苦手とする生徒が、本実践では勝利をあげ、喜ぶ姿が見られた。特に、女子の中には、家で家族と立ち合いの練習をする生徒がいたり、まわしを持って帰って地区の体育館でやりたいという生徒がいたり、これまでになく主体的に取り組んでいる様子が見られた。

さらに、男子では、自分よりも強い相手に挑んでいく姿を見ることや、親方（グループリーダー）として下級生に指導する姿が見られ、上級生としてのリーダーシップが発

揮されていた。

最後に今回の実践から今後の改題も見出された。生徒のより深い学びを引き出すためには、各自のめあてをより具体的なものとするため、取組の様子を動画で振り返させたり、生徒間で助言し合ったりする活動を多くしていくことである。

生徒は普段、保護者の送迎での登下校している。その影響もあってか、運動量も不足しがちであり、体育授業で怪我をしがちな生徒たちである。武道は、多少の痛みを伴うこともあることを確認しつつ、これからも本実践同様に安全に配慮した授業環境を整えたい。

## 5.2.2 スポーツ教育学の立場から

### 5.2.2.1 本実践から<sup>注5)</sup>

本授業は、へき地・小規模校における教科担当教員の不在の問題、武道の礼法、行動の仕方や考え方を深める授業づくりの難しさといった現場の悩み、ならびに他者との身体接触の経験に恵まれにくいといった現代の子どもと運動の関係をめぐる状況を受け止め、その解決の糸口として、相撲を取り上げその学習の可能性を探ろうとした試みであった。



写真3 全体で蹲踞の姿勢を確認

相撲は、土俵という限定された空間で行われ、その勝敗にかかわるルールは明快である。主なものとして「土俵の地面に体の一部が着く」「足の裏以外の体の一部が地面に触れる」「まわしが外れる」がある。こうした単純明快なルールであるからこそ、いろいろな動きを駆使しさまざまな工夫を凝らして相手と力比べをすることにより、勝敗を決することが可能となる。そこに相撲のおもしろさがあり、奥深さが認められる。このような特性を有し学びが深まる可能性のある相撲は、かつて子どもにとって日常の遊びであった。このことを考えると、生徒や教師にとって柔道や剣道より受け入れやすく、教師には学習を組み立てる上でも比較的抵抗感なく取り組むことができるのではないかと思われる。

また、武道の学習は得てして武道だからと、品位・礼節

を重んじ所作を習得することに執着してしまうことがある。しかしながら、それが、身体所作とその意味が生徒の中でつながらず形式的な動きに留まってしまったり、場合によっては、興味が持てず活動が消極的になってしまったりして、逆に生徒たちを武道の文化性を実践的に学ぶことから遠ざけてしまうことが懸念される。

この点に関して、本授業では、相撲のおもしろさを明確にし、それを追求していく中で十分に武道としての文化的性格をも学び得るという考え方に基づいていた。それは、武道としての相撲といった文化を踏まえた上で、それを手がかりとして、生徒たちにとっての相撲とは何かを考え、相撲の実践的な学びとして読み替えて、本単元が計画され実践されていたことに認められる。また、本単元は2時間続きの授業の形態を取ることで、生徒たちの十分な活動時間を確保しようと配慮したものであった。それにより生徒一人ひとりが、力一杯取り組みをする、自身の動きを振り返り練る、そして再び挑むといった活動に従事でき、1日の中で十分な学習の深まりを期待できると判断していたのであろう。

実際、生徒たちは、前半の1時間において、なかなか相手とのタイミングを合わせることができず体が立ってしまう立ち合いであったが、後半の1時間になると、立ち合いのタイミングが合い、なおかつそのスピードは小気味よい速さとなり、同時に力強さも備わってきた。これは、相手を尊重することや信頼することが内面において形づくられ、それが行為として成就してきた証であると考えられる。また、最初は腰高だった取り組みが、徐々に腰が据わり力の入った動きに変わってきた。こうした身体動作の変容は、他者との身体接触にかかわる濃密な質の高まりであると解釈できる。

なぜなら、こうした変容は、他者の身体を受け止めたり、その抵抗を感じたりといったことやどの程度の力で体勢がどうなるのか等を全身で理解できるようになった表れであると考えられるからである。加えて、このような生徒の技能の変化は、十分な時間の確保とおもしろいから真剣に取り組む、相撲の世界に浸り、自己の力の高まりにこだわるからこそ生ずる高まりであると考えられる。

つまり、楽しいから、おもしろいからうまくなりたい、滑らかな動きや力強い取り組みを極めたいといった身体的な渴望の充足に基づく学びへの意欲を原動力とした学び、そのこと自体に価値を見出した学びによる成果としてみとることができる。

以上より、本授業は、へき地・小規模校における実情に応じた武道の学習として、1つのモデルを示すことができた実践であったといえる。同時に、へき地・小規模校のみならず、武道学習の考え方と進め方の一般的なモデルとしての可能性を有した実践であるように思われる。その際、さらに実践を重ねて、相撲学習の深化をめざしていく上で、文化としての相撲の学習をどのように考え、計画して実践につなげていくのかが重要なポイントとなる。





写真4 低い体勢での立ち合い

#### 5.2.2.2 相撲の文化性から

竹石(2012)は、武道の教材研究の試みとして相撲を取り上げ、その体育で取り上げるべき「伝統」として、「腰肚文化」を基礎とする身体所作をあげている。すなわち、「腰」や「肚」に力を入れる動作を相撲の文化性としてあげ、その教育的可能性を指摘している。また、斎藤(2000)は、相撲の醍醐味が腰肚の文化と息の文化を柱とした伝統的な身体文化の精髓がぶつかり合うところであるとみている。

本授業においても、腰高だった取り組みが徐々に腰が据わり力が入った動きに変わってきた生徒の姿が認められたが、こうした点を相撲の文化性にかかわる学習という範疇でとらえ、さらに他の文化的内容の学びとの関連を意図して生徒たちの学習の深まりをとらえていくまでには至ってはいない。

今後こうした相撲の文化的特徴を整理し、「相撲の文化性」をどう捉え、その学習をどのように構想し生徒たちにとっての相撲学習を意味あるものにしていくかが求められる。

#### 5.2.3 教員志望学生の立場から

本実践では、将来保健体育の教員を目指している学生に参観を呼び掛けた。学生は相撲授業を受けたこともなければ、見たこともないということで、興味を持って参観することができた。そこで、参観後の学生の感想から、本実践を振り返ってみたい。

「初めて相撲の授業を見学したが、思っていたよりも生徒たちが積極的に取り組んでいたことに驚いた。生徒が授業に意欲的に取り組むことができた理由は、場の設定にあると思った。本物の土俵や柔道の畳は堅いイメージだが、相撲マットを使用することにより、投げられても痛くないという安心感から、ギリギリまで粘って勝負しようという態度が見られた。」という感想を寄せてくれた。

これは、身体接触を伴う相撲であるが故に、生徒たちは遠慮がちな取り組みになると予想していたものの、本気で相手と対戦している姿に、この学生は驚きを隠せなかったようだ。さらに、その要因を柔らかく安心して取り組める活動の場が、有効であったと分析した。外遊びが主流であっ

た世代からすると、土の上で投げたり転んだりすることに何ら抵抗を感じないが、そのような体験に乏しい世代では、必要な配慮となり得るのかも知れない。



写真5 女子の思い切りのよい投げ技

「また、最初は押し相撲や片足相撲などから入ることで、体格差や技術差に関係なく『相手と勝負して勝ちたい』という武道の本質的なところに触れることが出来たためであると考えられる。」という感想もあった。

ここでは、武道をスポーツの一般的特性で考えたとき、その機能的特性は競争型となり、人々は相手より強い自分という自己優越感を求めて活動に入り込んでいく。武道は伝統的な指導法として、技の習得ありきで活動が進んでいきがちとなり、その技を使って相手と勝敗と競い合う場面にまで、多くの時間を要してしまう。そのため、生徒の学習意欲は低下し、他の運動領域と比べて敬遠されがちである。そこで本実践では、技獲得のための反復練習時間を最小限にし、すぐ出来そうな試合から高まった力で行う試合へと発展させていった。

「観ることが出来たのは、導入のたった一回の授業であったが、生徒と対戦する中で、技術が身につけば確実に強くなると感じた。」という感想からは、意欲的な取り組みで対戦をかさねていく中で、技の獲得によりさらに相撲の試合として内容の高まりが期待できるものといえる。

## 6 まとめにかえて

### 6.1 相撲授業の有効性

本実践は、武道を行ったこともなく体育免許を有していない先生が、相撲を指導する場合の利点を見出すことを目的としていた。

本実践では、10時間の単元時間の中で、「押し相撲の個人総当たり戦」「個人総当たり戦」「団体対抗戦5回」と、その間の練習時間を保障しつつ、実施することができた。この流れは、前述の「単元の展開」によるが、2時間まとめた授業であったため、準備・片付け時間を含めても十分な活動時間の中で試合数を確保できた。柔道や剣道では、



とてもこのような試合数を実施することができない。

また、この試合の審判（本実践では行司と呼んでいた）や呼び出し・記録係も生徒が交代で行った。勝敗の判定が難しいときは、みんなで協議し、取り直しをすることもあった。授業者が判定をすることもなく、生徒に任せることができた。

## 6.2 相撲の特性への触れやすさ

どの運動もその特性に触れることが、自ら取り組んでいく原動力となるが、他の武道種目に比べ相撲は、その点において有利であるといえる。

前述したように、競争の特性に触れ、勝ちたいという思いが「資料1 単元終了後のアンケートから」も読み取れる。授業者としては、最後まで活動が緩むことなく行われたことに相撲の教材としての力を感じた。

女子の場合は、中学生ともなると人間関係を過剰に意識して、本気の勝負を行わなくなりがちである。そのような中では、相手と勝負するフリをしたり、照れ笑いをしたりしながら、やっている格好だけの取り組みが心配される。それでは特性に触れることができない。

勝敗にこだわる思いが、家にまわしを持ち帰り、家族と練習する姿を生んだ。かさねていうならば、いろいろな技の学習を毎時間行っていただけでは、そのような姿は生まれなかったのではないかと。

## 6.3 団体戦の意義

他の種目でも同様だが、個人戦と団体戦の学習では、1試合1試合の歓声や声援に大きな差がある。それは、今回の実践でも感じられた。

団体戦では、対戦順を仲間と話し合う作戦が重要な要素となるが、試合前の練習もその団体ごとに行うことに意味がある。今回は相撲部屋をイメージして、部屋ごとの練習と言った。この部屋ごとの練習が楽しかったという、生徒の記述もあった。部屋の仲間の向上がチームの向上になるとわかると、アドバイスをすると共に、進んで練習相手となっている姿があった。

## 6.4 男女共習への広がり

少人数学級では、対戦相手が限定されているため、勝敗の未確定性が保てなくなると、どうせ練習しても勝てるわけがないと諦めたり、練習しなくても負けるわけがないと、活動に意欲的でなくなることが予想された。

本実践においても男子が6名で、女子が8名と人数が少なく、授業時間内に何回も試合を行うことはできたものの、総当たり戦を何度か行ってもその順位に変化がないと、前述のような思いから授業全体に緊張感が失われることも予想された。

小学校の低学年では、男女の対戦に抵抗がなかった子どもも、男女差が顕著に表出してくる中学生期では、そういかなくなることは十分承知している。



写真6 男女での練習

授業終了時の感想の中では、女子が男子とも試合をしてみたかったというものがあった。今回は、男女の対戦を行わない計画であったが、部屋ごとの練習では、男女で練習する姿が見られた。このような自発的な姿は認めつつ、少人数での対戦を飽きることなく行うには、どのような条件で男女の対戦も取り入れていくのか、研究をかさねたい。

## 謝辞

本研究は、旭川市立桜岡中学校長である高橋一寛先生の深いご理解により実践することができた。また、生徒の皆さんにも大変意欲的に取り組んでもらった。この場を借りて御礼申し上げます。

## 附記

本研究は、平成28年度北海道教育大学学校・地域教育研究支援センターへき地教育支援部門の研究補助金を受けて実施された。

本稿では、1および5.2.1を福井が、5.5.2を越川が担当し、それ以外は小出が担当した。

## 注

注1) 筆者(小出)は、2010年~2011年にかけて、北海道教育大学附属旭川中学校にて相撲授業を実践し、相撲授業の有効性を訴えていた。この様子は、地方の月刊誌である「北海道経済」に取り上げられたため、旭川市を中心とした北海道北部地域に、相撲授業の研究協力の受け入れ体制があることを、広く知らせることとなった。

注2) この内容については、北海道通信平成24年8月27日付けに掲載されている。委員からの安全な武道授業の実施状況についての質問に対しては、柔道指導経験のない教員に対し、北海道教育委員会として実技講習会を実施するとしている。

注3) 旭川市教育委員会は、この調査に基づき柔道畳と剣道防具を各校に配布するのに3ヵ年を要した。現在、旭川市の中学校数は、統廃合により25校となった。  
(平成29年3月現在)

注4) 教科担任の福井は、T2として授業に参加しつつ、生徒の様子を観察した。

注5) 平成29年2月23日に行われた7・8時間目の授業の参観、ならびに単元計画に基づく考察である。

#### 〈参考引用文献〉

- 北村尚浩(2010)「中学校における武道必修化に関するアンケート調査・調査報告書」 鹿屋体育大学生涯スポーツ実践センター
- 生沼芳弘(2007)「すもう」『中学校体育実技』 学習研究社年 pp.259-264
- 生沼芳弘(2010)「相撲男女必修の武道のための条件整備『中学校体育男女必修「武道」指導の手引き』 学研教育みらい p.23
- 小出高義・鈴木秀人(2011)『『楽しい体育』の立場から考える武道の授業』 体育科教育59巻-12号 pp.62-65.
- 小出高義(2010)「授業モデル男女共習の可能性、発展性」『中学校体育男女必修「武道」指導の手引き』 学研教育みらい p.172-179.
- 小出高義(2015)「相撲の実践例」『中学校・高校の体育授業づくり入門』 学文社 pp.278-283.
- 濱田将慈(1998)「相撲の授業(基本動作を身につけ、得意技を探る授業)」『シュパース中学校体育実技・スポーツ教育実践講座』 ニチブン pp.69-75
- 間瀬誠吾(1998)「得意技を身につけ、相手に挑戦する授業」 同上書 pp.76-83
- 塔尾武夫(1998)「相撲」 同上書 pp.187-195
- 鳥居泰彦「武道のすすめ」『月刊武道』 539号 p.10
- 文部科学省(2008)「中学校学習指導要領解説保健体育編」
- 斎藤 孝(2000)身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生. NHKブックス:東京.
- 竹内洋介(2012)相撲の文化史にみる「伝統」と「近代」—武道の教材研究の試み—. 九州情報大学研究 論集, 14: 75-84.

## 資料1 単元終了後のアンケートから

	どんなところが楽しかったか	どんなことができるようになったか	どんなことを工夫したか
111	引き分けで終わらずに、きちんと決着がつくまで続けられること。	「はっけよい」が聞こえたとき、すぐに前に出ることができた。 相手の力を利用して、転ばせることができた。	早く出るようにした。
112	相撲は力の差での勝敗ではなく、自分の考え方や味方の工夫によって、勝敗を変えられるというのが楽しいところだと思った。	はっけよいの後、勢いよく相手を押すことができるようになった。 相手の力を利用して、相手を土俵から出すことができた。	初めから、勢いや気持ちを高めたところ。
113	相手の行動を予測して考えながら動けたのが楽しかった。	最初は、投げたり腰を低くしたりできなかったけど、できるようになったのがよかった。	相手がどんな風に攻めてくるかを予測し、それに応じて体が動くようにするのを工夫して頑張った。 押し出しの時に相手よりも早く押し出せるようにするということを工夫した。
211	相手と試合をすること。 どんな相撲の技があるか考え工夫すること。	相手に突進できるようになった。 格上の相手にも勝てるようになった。	相手に勝てるような相撲のパターンを考えた。
212	相手と競り合った時が楽しかった。 また、個人戦で自分より強い相手と戦ったこと。	自分の勝ちパターンにつなげる工夫ができるようになったことです。	相手によってどうか勝てばいいか考えていきたい。
213	相手に勝ったり、どっちが勝ったかわからない良い試合の時。 部屋ごとに練習していくことができた。 自分の得意技が決まった時や、先輩に勝った時。	足を持ったりするなどの技をかけることができました。 投げることができるようになった。 押したり投げなくても、勝てるようになった。	怪我している足をかばいながらも相撲をしたこと。 相手の足を取って倒すこと。 投げられたり、押されたりしても耐えることを工夫した。 相手の姿勢や攻め方を見て、自分の相撲を工夫した。
215	相手がどんな相手でも戦えるところ 相手との交流を深めながら行えるところ。 けがをしても自分も相手も頑張れるところ。	押し技や、相手に近づき素早く足をかける足技ができるようになった。 腰を低くして、相手の中に入る事。	相手の技を知って、中に入り強く押す。 自分のできなかった技を仲間とアドバイスしあいながらできるようになった。
216	ほとんどの試合に勝つことができたこと。 投げ技を有効に使うことができたこと。	相手の戦い方を見て、下に落とししたり、かわしたりして、自分の戦い方を変えられるようになった。	相手によって戦い方を変えた。 腰を低く保って、踏ん張りを意識した。 足が土俵から出ないようにした。 相手の攻撃をかわすようにした。
217	相手を投げること。 相手の弱点を知り攻めること。 いろいろな技を知れたこと。	最初に素早く相手にぶつかること。 相手を揺さぶり投げること。	投げを相手にされたとき、相手を先に土をつけて投げ勝つようにしました。
218	相手に勝るとき。 相手に押されて負けかけている時に、巻き返して勝てたのが楽しかった。 数秒で決まる試合。	相手を押し返す。 勝てるようになった。 腰を低くして試合ができるようになった。 相手の攻めに耐えて、押し返せるようになった。	相手がどんなまわしの掴み方をするかによって、攻撃を変えた。負けかけている時に耐えて、相手が気を抜いた時に手を押し込んだ。男子に挑んで勝てるように工夫した。 足かけをした。
219	相手を投げること。 相手に勝つ作戦を考えること。	相手を投げやすくするため、自分の流れを持って行く。	ある程度耐えて、相手の体力が無くなったところを見計らって、攻め込む工夫。
311	投げ技を使って、相手を土俵から放り出した時。	投げ技や押し技を使って、土俵から追い出すところ。	相手の弱点について、技を決められたところ。
313	勝った時でした。	立ち会いやいろんなパターンで勝つことができるようになりました。	相手に合わせて、その弱点をつけるように工夫しました。
313	相手を投げる時の爽快感やチームで協力して勝ちをもぎ取る所。	相手を投げられるようになった。 自分で技を考え、実行に移すことができた。 T君に勝てるようになった。	負けた相手のことを思い返し、練習の仕方にもそれに応じて変えたり、本番前にもイメージトレーニングをしたりした。